

JCNE助成金活用セミナー

「助成財団との付き合い方」

(公財) 日本非営利組織評価センター 山田泰久
Twitter : @canpan2009
<http://www.facebook.com/yamadamay>

2023年2月Ver.01

プロフィール：山田泰久（やまだやすひさ）

公益財団法人日本非営利組織評価センター 業務執行理事

寄付月間 推進委員会委員／共同事務局事務局長

一般社団法人全国コミュニティ財団協会 監事

イシス編集学校（松岡正剛氏主宰） 師範代

群馬県高崎市出身、慶應義塾大学文学部卒（フランス文学専攻）。

1996年日本財団に入会。2009年から公益コミュニティサイト「CANPAN」の担当になり、NPO×情報発信、助成金、IT活用、寄付をテーマに様々なNPO支援の活動に取り組む。

2016年4月、（一財）非営利組織評価センター（JCNE）の設立とともに、業務執行理事に就任し、非営利組織の組織評価・認証制度の普及にも取り組んでいる。

※2022年11月に公益財団法人化＆名称変更。

twitter: @canpan2009

Facebook <http://www.facebook.com/yamadamay>

note <https://note.com/yasuhisayamada>

CANPAN講座 <http://blog.canpan.info/c-koza/>

JCNE・NPOフォーラム <http://blog.canpan.info/cpforum/>

情報発信のこともやっています。

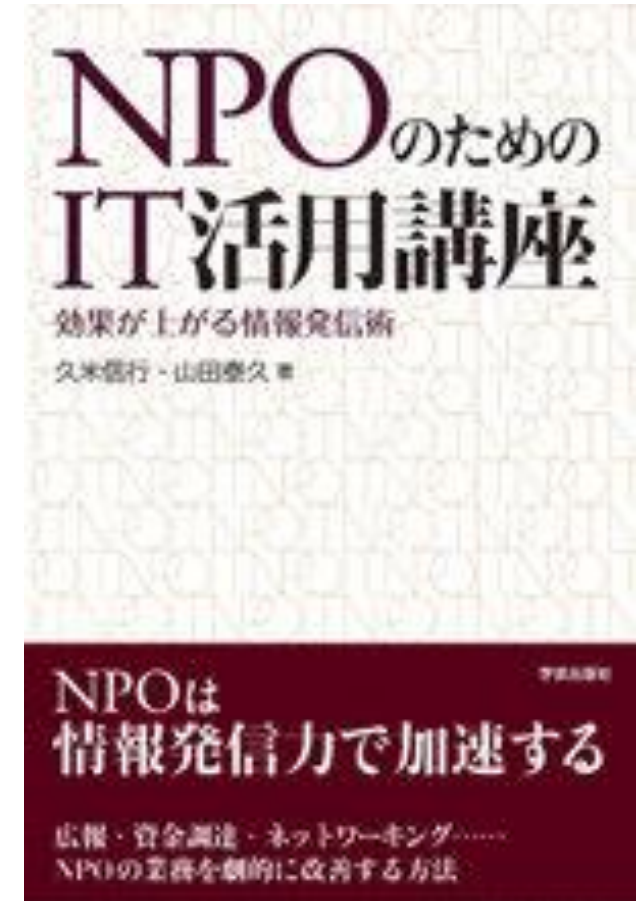
セミナーだけでは伝えきれないことを本にまとめました。

NPOのためのIT活用講座
～効果が上がる情報発信術
久米 信行 著 山田 泰久 著
学芸出版社
四六判・224頁・定価 本体1800円＋税



■■ 内容紹介 ■■

「お金が足りない」「忙しい」「どんな情報を発信していいかわからない」…そんなアナタに、無駄な手間とコストをかけず、個人・団体としての活用を使い分け、広報、資金調達、マーケティング、キーパーソンとのネットワーキングなど、NPOの業務に劇的な効果をもたらす方法を、二人の達人が豊富な事例をもとにお伝えします。



日本非営利組織評価センター（JCNE）

2016年4月1日、全国の非営利組織の評価を行うことで信頼できる組織の情報を広く社会に発信し、支援環境の充実に寄与するために非営利組織評価センター（JCNE）を設立しました。

チャリティの歴史が長い諸外国では、第三者である評価機関が寄付等を受けて活動する団体の運営状況を評価認証し、結果を公開しています。日本でも同様の非営利組織の評価が必要な時期になりました。

この非営利組織評価センターは民間セクターの手で作りたいという願いから、多くの団体に設立のご支援をいただきました。株式会社をはじめ助成財団、NPO、一般法人といった多様な設立発起人からのご出捐。そして賛同パートナーである助成財団からの応援を得ています。さらに5年後の自立を目指し事業運営には日本財団の助成をいただいています。

組織マネジメントに関する第三者評価



グッドガバナンス認証

JCNEの独自の評価基準に基づき、専門の評価員が団体を訪問し、ヒアリングや書類確認によって組織運営の状況进行评估しています。その評価結果をもとに、非営利組織の中でも組織運営やガバナンスが一定水準以上のレベルの団体を認証しています。グッドガバナンス認証団体は外からは見えにくい組織内部の状況を第三者機関に開示して、信頼性・透明性の向上に努めている団体です。また、課題がある場合も見直し、改善をしていく姿勢や意欲のある団体でもあります。寄付をしたい、ボランティアとして参加したいという市民や企業の方が、期待をかけて支援ができる団体として紹介しているのが「グッドガバナンス認証団体」です。

https://jcne.or.jp/evaluation/good_governance/



グッドガバナンス認証

ベーシックガバナンスチェック

JCNEの独自の評価基準に基づき、団体運営の基本についてセルフチェックと提出書類をもとに簡易的に評価をしています。評価結果は「ベーシックガバナンスチェックリスト」で公開され、随時更新されます。継続的に第三者評価を受け、情報開示に積極的な透明性の高い団体として、JCNEは掲載団体への支援を推奨しています。

ベーシック評価基準23項目に基づく簡易的な組織評価です。

<https://jcne.or.jp/evaluation/outline/>

欲しい未来へ、 寄付を贈ろう。

欲しい未来へ、寄付を贈ろう。



一年の終わりに、考えたいのは未来のこと。

もっと楽しい未来。もっと優しい未来。

もっと平和な未来。もっと多様性が認められる未来。

そんな未来を手にするために、あなたの気持ちを寄付にしよう。

寄付は意思、寄付は投資、寄付は応援、寄付は願い。

寄付で未来は変えられるのです。

だから、「Giving December」。

一年の終わりに、未来を考え寄付をする。

そんな習慣を、はじめたいと思います。

欲しい未来を叶えてくれるさまざまな取り組みに、

あなたの想いを託しましょう。

さあ、年の終わりに、新しい「寄付」がはじまります。

欲しい未来へ、寄付を贈ろう。



寄付月間～Giving December～について

寄付月間とは

寄付の受け手側が寄付者に感謝し、また寄付者への報告内容を改善するきっかけとなり、そして多くの人が寄付の大切さと役割について考えることや、寄付に関心をよせ、行動をするきっかけともなる月間を制定する。

推進委員会

委員長 小宮山宏 三菱総研理事長/元東京大学総長

共同事務局長 山田泰久 一般財団法人非営利組織評価センター 業務執行理事

民間非営利組織、企業、行政、国際機関などで寄付に関連する取り組みをしている全国代表的な機関の代表者が集まり、35名の推進委員会を構成 各法人の有志による共同事務局を設置して、寄付月間の統一ロゴ作成や各方面との連携による全国的周知による啓発活動、イベント開催や賛同パートナー（無料）の拡大などを行います

その他

・社会課題の解決のための寄付の促進が本委員会の設立の背景にあるが、寄付の定義は、寄付者個々人によって違いがあり、多様性を許容する観点から、寄付の定義について委員会としては明確な排他性をもたない。

・本委員会、寄付月間参加は、各主体の自発性に基づくものであり、何ら強制的な要素を含まない。また、特定団体や特定課題への寄付を要請するものではなく、委員会としての政策提言を目指すものではない。



いますぐ体験！



編集力チェック 無料

編集力とはどんなもの？ イシス編集学校の稽古を無料で体験できます。ウェブから申し込むと「お題」がメールで送られてきて、回答を返信すると、師範代から指南コメントが届きます。

▶ <http://es.isis.ne.jp/web.html>



ISISエディットツアー

ブックサロンスペース「本楼」ほかユニークな書棚空間を巡りながら、編集的な体験を楽しむツアーです。映像や座談、ワークショップを交え、アタマもココロもやわらかくする2時間のプログラムで、「編集」のエッセンスを体感。イシス編集学校の編集稽古も体験できます。

● 毎月開催、日程限定。 ● Ticket: 1,500円(税別)

▶ <http://es.isis.ne.jp/edittour.html>



詳しくはイシス編集学校ウェブサイトをご覧ください。 <http://es.isis.ne.jp>

資料請求・お問合せ・お申込は

イシス編集学校 学林局

front_es@eel.co.jp

本日の内容

助成財団との付き合い方について、具体的なマニュアルやノウハウ集が世の中にあるわけではないので、山田がこれまでに見聞きしたことを中心にお話します。特に、ここ数年で、助成金の大きな変化（伴走支援、プログラムオフィサー、利益相反、事業評価、デジタルなど）が生じていますので、そういった視点からも解説いたします。

- ①助成財団とのコミュニケーション（団体／担当者）
- ②助成財団側の論理（利益相反、利益供与、倫理など）
- ③助成事業後の関係性

※ここでいう助成財団は、企業や独立行政法人などを含めて、助成プログラムを実施している組織の総称として表現しています。

★今回は、主に助成金をもらっているNPOの立場について、お話します。

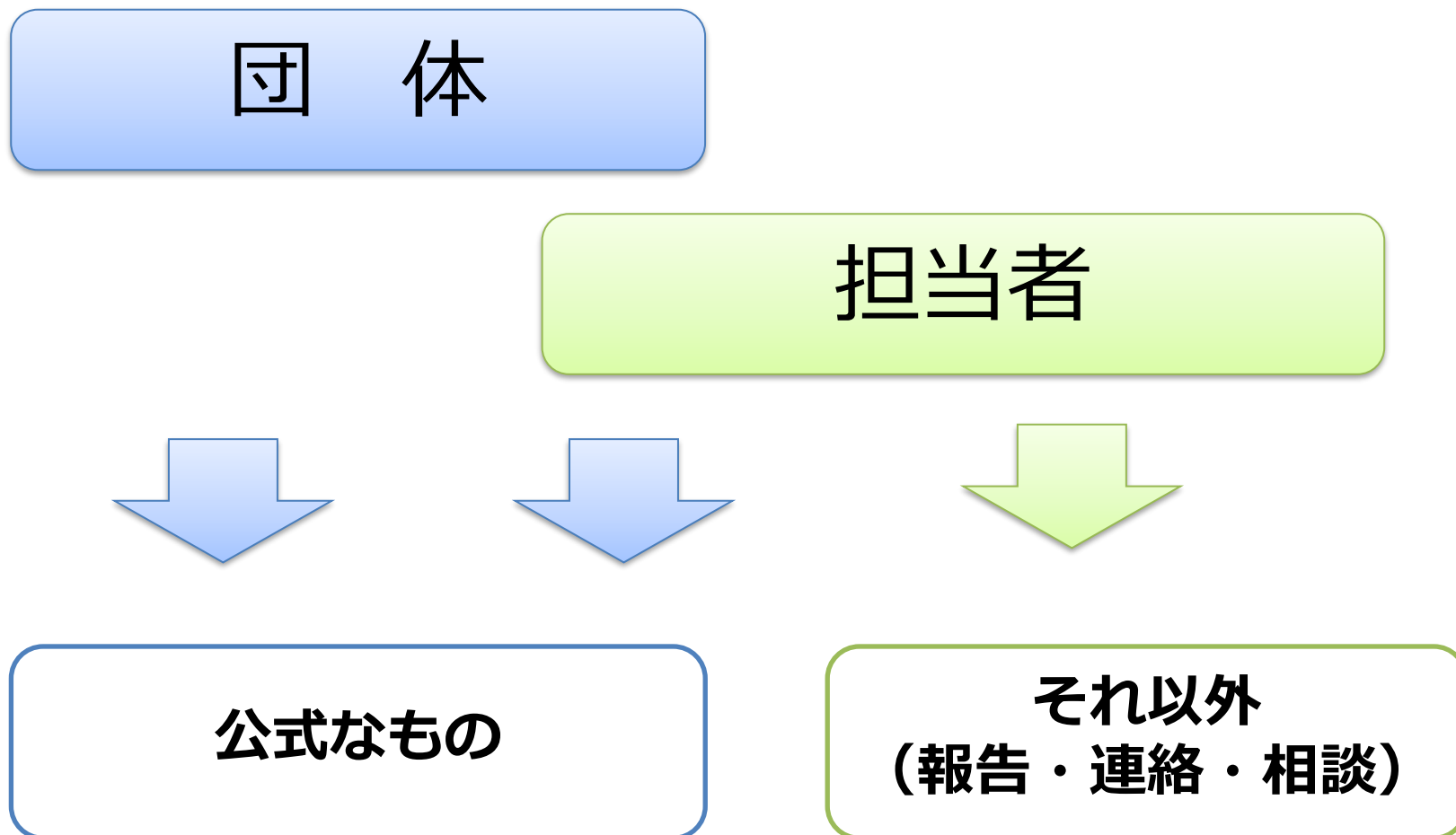
NPO側の意図

- ① 何かあれば相談できる関係性を構築したい
- ② 団体の理解者を増やしたい
- ③ 社会課題の周知啓発につなげたい
- ④ 参考になる情報を教えてほしい

助成財団にとってNPOとは？

- ① 助成プログラムの顧客（広く周知したい、申請数を増やしたい）
- ② 助成金申請者（→採択団体／不採択団体）
- ③ 助成先団体（実施中）
- ④ 助成先団体（事業完了）
- ⑤ 協力者
- ⑥ 特定分野の専門家

助成財団とのコミュニケーション



公式なコミュニケーション

- ① 助成プログラムの実施要領、手引き、ガイドブック、マニュアルなど
- ② 助成表示
- ③ 事業報告書、収支報告書
- ④ 助成財団主催の授賞式、交流会、合同研修会、報告会
- ⑤ 現地訪問・視察、事業視察、イベント参加、イベント挨拶
- ⑥ インタビュー（サイトや広報誌等への協力）
- ⑦ 伴走支援、プログラムオフィサーによる支援、非資金的支援
- ⑧ 助成決定の理由、フィードバック（後述）

公式、あるいは非公式

- ① 助成財団や関連企業が所有している施設の貸し出し
- ② 関連企業による各種サポート
- ③ ボランティアの派遣
- ④ 助成財団のネットワークの活用、専門家等の紹介

助成財団とのコミュニケーションのポイント

- ◆ 公式なものをしっかり活用する
- ◆ 助成財団関係者と直接会える機会はなるべく参加し、関係性を深める
- ◆ 助成財団からのアンケート協力や周知協力などもなるべく協力する

助成財団の担当者とのコミュニケーション

1. 担当者によっていろいろ

- プログラムオフィサーという職種を設置しているケースも
- NPOへのサポートの内容が決まっている
- 担当者の裁量で対応している
- 事務連絡、進捗管理、事業サポート、組織基盤強化、翌年度以降の事業開発

2. 担当者とのご縁

- 助成担当としての経験
- 得意とする分野・テーマ、好きな分野・テーマ、専門性
- 分野によって熱量が違ってくる(社会情勢、重点テーマ、担当者の興味など)
- 団体の規模やステージによる濃淡

助成が決定したら、ぜひやっておきたいこと

担当者に採択の理由を聞いてみる

- 不採択の場合、理由を教えてもらうのが難しい
- 採択された時は、公式コメントではなく、担当者としての感想を教えてくれる
- 担当者に聞きたいこと
 - ・採択の理由
 - ・審査の中で厳しかったこと
 - ・審査の中で興味関心があったこと
 - ・助成財団が期待していること(事業、そして団体に対して)

熱心な担当者像

- ① 謙虚に話を聞く人
 - ② 事業推進のサポートをしてくれる人
 - ③ 事業に積極的に関わってくる人
-
- 積極的に現場のニーズや社会のニーズを知りたい、勉強したい
 - 積極的にNPOの現場を訪問したり、出張したり
 - 支援先のNPOや助成事業のことをしっかり理解したい
 - 社会問題やNPOセクターのことを理解したい

NPO（助成先団体）からの働きかけ

- ① 現場見学のお誘い
- ② シンポジウムや勉強会、セミナーなどへのお誘い
- ③ あるいは、来賓としての挨拶依頼
- ④ 調査レポートや報告書（財団に提出するものではなく外部向けのもの）への
寄稿依頼
- ⑤ 進捗報告を兼ねて、次の申請相談

助成財団が欲していること

助成財団が助成先団体に期待していること

- 事業として成果を出すこと
- 助成を通じて有益な情報を得ること

助成先団体のNPOと助成財団の大きな差は現場があるかどうか。助成財団は現場を持っていない。現場がないということはリアルな情報を得にくい。

助成財団がよりよい助成プログラムを実践していくためには、常に現場のリアル、社会状況について情報をキャッチアップしていく必要がある。

そのためには、助成事業を通じて、あるいはそれを機会に助成先団体から提供される情報がとても大事。

★助成財団とNPOによる相互作用

NPO側からの提供

- ◆ 積極的に情報提供を行うことによって、助成財団の担当者にとって団体理解につながる。
- ◆ 団体のことを詳しく知ってもらえると、その団体に適した情報をもらえる機会もある(但し、担当者による)。
- ◆ よき担当者は積極的に情報収集している。
- ◆ NPO支援に関する情報も含まれている。
- ◆ 例えば、他の助成財団の助成金情報など。
- ◆ 助成金のプロが選んだ、お薦めの助成プログラムを教えてもらえる。

例：次のステージなら、こういう事業展開なら、この助成プログラム！

事業中、もしくは事業終了後

- ・団体のメルマガの送付

- ・団体の会報誌の送付

- ・イベントのご案内

(人によって)

- ・担当者のFacebookの友達申請、Twitterのフォロー

- ・助成財団が主催するイベントへの参加

- ・助成財団担当者も参加するイベントの参加

(ファンドレイジング日本、助成財団センター／NPO支援財団研究会のイベントなど)

- ・メールでの不定期な報告や連絡

助成財団の利益相反の対応

助成財団の利益相反の対応

- ① 休眠預金で、助成財団（資金分配団体）の役職員による利益相反、倫理がクローズアップ。
- ② コミュニティ財団の増加。
- ③ 助成財団（お金を出す側）に、NPO側の人が理事や選考委員等に関わるケースが増えている。
- ④ 助成財団の役職員がプロボノ的にNPOに関わるケースもある。
- ⑤ お金を出す側ともらう側、申請する側と審査する側の境目がなくなってきている。
- ⑥ プログラムオフィサーの増加とその役割。
 - ・申請前の事業開発
 - ・助成決定後の伴走支援、非資金的支援
 - ・出す側ともらう側の関係性がより近くなっている

★助成財団の役職員（プログラムオフィサーを含む）による利益相反防止と倫理

★公平性と公正性の担保、公募と非公募

NPOの対応

- ① 団体の役職員が助成財団に関わっていないかを定期的に確認する。
- ② 例えば、休眠預金の資金分配団体の役職員が関係している団体は申請できないなどのルールが設定されている。
- ③ その他、自治体や地域の助成財団等の助成プログラムの選考委員になっていると、申請ができない。

助成財団の関係者と交流する時には、先方の迷惑にならないような配慮も必要。

- ・お土産（訪問した際／来てもらった時）
- ・飲食等のもてなし

参考情報：国家公務員の倫理

国家公務員倫理啓発活動

<https://www.jinji.go.jp/rinri/2022poster-zigyousya.pdf>

リーフレット

https://www.jinji.go.jp/rinri/siryou/jigyousha_leaflet2020.pdf

国会公務員倫理審査会

<https://www.jinji.go.jp/rinri/>

最後に

- ① 助成事業の実施や報告書の提出について、記録が残る。
- ② 団体同士として、NPOと助成財団のよい関係を構築する。
- ③ 助成財団の担当者としてよきコミュニケーションを取る。
- ④ 但し、規模が大きい助成財団、独立行政法人、企業系財団や企業の場合は、担当者が変わりがち。

助成金とは・・・

樹木は育成することのない
無数の芽を生み、
根をはり、枝や葉を拡げて
個体と種の保存にはあまりあるほどの
養分を吸収する。

樹木は、この溢れんばかりのの過剰を
使うことも、享受することもなく自然に還すが
動物はこの溢れる養分を、自由に
嬉々としたみずからの運動に使用する。

このように自然は、その初源からの生命の
無限の展開にむけての秩序を奏でている。

物質としての束縛を少しずつ断ちきり、
やがて自らの姿を自由に変えていくのである。

**“デンマーク王子アウグステンブルク公にあてた
美学的なことに関する書簡第27号より一部を抜粋”
フリードリヒ・フォン・シラー**



横浜／ランドマークタワー